

<特集補遺「情報構造と名詞述語文」>

タイ語の情報構造と名詞述語文  
Information structure and nominal predicate sentences in Thai

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン(齋藤)  
Sunisa Wittayapanyanon (Saito)

東京外国語大学世界言語社会教育センター  
World Language and Society Education Center, Tokyo University of Foreign Studies

**要旨:** 本稿は特集「情報構造と名詞述語文」(『語学研究所論集』第21号, 2016, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は20個のアンケート項目に対するタイ語データを与えることである。

**Abstract:** This report contributes to the special cross-linguistic study on 'Information structure and nominal predicate sentences in Thai' (*Journal of the Institute of Language Research* 21, 2016, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the Thai data for the question of 20 phrases.

**キーワード:** タイ語, 情報構造, 名詞述語文

**Keywords:** Thai language, information structure, nominal predicate sentences

## 1. はじめに

本稿では、『語学研究所論集』第21号特集「情報構造と名詞述語文」のアンケート項目の(1)から(20)までの例文の筆者訳によるタイ語訳を掲げ、それに適宜補足説明を加える。日本語の例文(1)に対して、異なるタイ語の語順にて、比較例示すべき複数の文が考えられる場合、(1)-1, 2...として複数の文を示している。その際、タイ語としての自然な文を示すため、語句の非表示・置き換えや語順の変更などにより、元となる日本語例文に加え、タイ語文の意味に近い日本語訳も加えた方が良いと思われる文には筆者の判断で各文にタイ語を元にした日本語訳を追記している。それに加え、各例文を説明する目的で別の文を追加している場合は、(1)-a, b...として記載している。また、タイ語において同じ位置で日本語に対応するタイ語語彙が複数ある場合は、[...]とし、どの語彙を使ってもよいということを示す他、<...>で示したものは非表示が可能であることを意味している。また本稿のグロスなどで使用している略語については、本稿末に一覧を記載している。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 2. タイ語訳文データ

タイ語の情報構造に関して最近では峰岸(2019)が、「主語+動詞+目的語」を基本語順とするタイ語の構文において、統語レベルでの句のいわゆる「移動」が、情報構造とどのような相関を持つかを概観している。タイ語では左方転移によって文頭に移動した句は、対比的な主題として機能するほか、関係詞 *thii* を付加することで形成された分裂文は、句を際立たせる機能を担う。右方転移によって文末に後置された句は情報構造上の焦点として機能する他、疑問詞や目的語は、焦点化されやすいが、移動には統語構造上の制約もあると述べられている。また、峰岸・スニサー(2019)では、タイ語の構文上の主題に関する一般的な考察とともに、会話コーパスにおける、談話上の主題(旧情報)と焦点(新情報)を結合する接続詞、関係詞、指示代名詞、句末小辞などといった機能語(情報結束語)の分析を行っている。

### (1) 【対比焦点 (主語)】 (例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

「えっ、ヌンが来たの?」

*ʔáaw nùŋ maa rǎə*

INTJ PSN come Q

「いや、ヌンじゃなくてソーンが来たんだ。」

#### (1)-1.

*pláaw mây chây nùŋ sǎŋ [rǎk/ tàŋhàak] thii maa <nâ?>*

NEG NEG PSN PSN FOC REL come FOC

(1)-1 では関係詞 *thii* を用いて分裂文を形成し、主語を叙述の焦点として取り出すことが可能であり(峰岸 2019), (1)-1 では主語 *sǎŋ* 「ソーン (人名)」に焦点を当てるため、関係詞 *thii* が用いられている。さらに焦点マーカ-*rǎk/ tàŋhàak* を付加することで、*sǎŋ* により焦点を当てることも可能である。さらに主語や目的語に焦点を当てる句末小辞 *nâ?*(峰岸・スニサー2019)は、ここでは非表示も可能である。

#### (1)-2. 「いや、ヌンじゃなくて来たのはソーンだ。」

*pláaw mây chây nùŋ thii maa nâ? sǎŋ [rǎk/ tàŋhàak]*

NEG NEG PSN REL come FOC PSN FOC

また、(1)-2 のように述語を取り出し、左方転移させる疑似分裂文も可能である。但し、(1)-2 の場合、(1)-1 と異なり、句末小辞 *nâ?* は非表示とすることは出来ない。

#### (1)-3. 「いや、ヌンじゃなくてソーンだ。」

*pláaw mây chây nùŋ sǎŋ [rǎk/ tàŋhàak]*

NEG NEG PSN PSN FOC

発話者と対話者の間で、誰か人が来たこと自体について認識している場合、(1)-1 や 2 の分裂文構造ではなく、(1)-3 のように関係節を非表示とすることも可能であるが、*nùŋ* 「ヌン (人名)」と *sǎŋ* の間には一定のポーズ(間)が必要となる。焦点マーカ-である *rǎk/ tàŋhàak* を非表示とする場合、ポーズを長めに取る、もしくは *sǎŋ* を通常よりも伸ばして発音することで、*sǎŋ* に焦点を当てることが可能である。

(1)-4. 「いや, ソーンが来た. ヌンじゃなくて。」

plàaw sǎɔŋ maa mây chây nùŋ  
NEG PSN come NEG PSN

(1)-4 では, 主語 sǎɔŋ を nùŋ より前に置き, nùŋ と対比させながら, sǎɔŋ に焦点を当てている。

(1)-5. 「いや, ヌンじゃなくてソーンが来た。」

plàaw mây chây nùŋ sǎɔŋ maa <nâ?>  
NEG NEG PSN PSN come FOC

句末小辞 nâ? を使用することで, 「sǎɔŋ が来た」ことに焦点を当てることが可能となる。また, nâ? を非表示とすることも可能であるが, 焦点を当てるためには, maa を長めに発音する必要がある。

(2) 【WH 焦点(主語)・WH 応答焦点(主語)】

「誰が来た(の)?」

(2)-1.

khray rǎə thii maa  
PRN.INDF Q REL come

(2)-2.

khray maa rǎə  
PRN.INDF come Q

(2)-1 は来る候補が何人かいる前提で, その中で誰がきたのかを問い, (2)-2 については, 人が来る予定がなかったが誰か来た場合, またはその人が来たことで普段とは異なる雰囲気であることを示す主観的な印象を与えている。また, (2)-1 では関係詞 thii を用いて分裂文を形成し, WH 焦点(主語)を叙述の焦点として取り出している。これは文頭にある主語をとりたてるために文頭に残しつつ, 関係節を主語と同格相当のものとして右方転移を行ったものと考えられる(峰岸 2019)。疑問小辞 rǎə は(2)-2 のように文末, または(2)-1 のように, WH 焦点である khray 「誰」の後に付加することで, WH 焦点を際立たせている。

(2)-3.

khray maa  
PRN.INDF come

(2)-3 は, 例えばその家に住んでいない者の声が聞こえた, またはドアを開ける音が聞こえたといった場合に, 事実確認として, 客観的に質問していることが想起される。

(2)-4. 「来たのは誰?」

thii maa nâ? khray <rǎə>  
REL come FOC PRN.INDF Q

(1)-2 と同様, (2)-4 は関係詞 thii を用い, 疑似分裂文を作ることで, 関係節を文頭に置く左方転移, 及び焦

点マーカとなる句末小辞 *nâ?* により、関係節を主題化し、「来た/来なかったのは誰」という対比的な意味となる。グループの中に対象が複数いる中で、一部の人が来ることのみは分かった上で、実際に来たのは誰かを問うニュアンスである。

「ヌンが来たよ。」

(2)-5.

*nùnŋ maa <nê?>*  
PSN come FOC

(2)-6. 「ヌンだよ」

*nùnŋ <ŋay>*  
PSN FOC

(2)-5 では文末に句末小辞 *nê?* を付加することで文全体に焦点を当てている。また、(2)-6 のように述語を非表示とし、主語 *nùnŋ* 「ヌン(人名)」に句末小辞 *ŋay* を付加することで、WH 応答焦点となる *nùnŋ* への焦点を際立たせることも可能である。(2)-5, (2)-6 とも句末小辞 *nê?* や *ŋay* を非表示とする場合は、(2)-5 では *maa*, (2)-6 では *nùnŋ* といった文末の語を通常より長めに発音する方が焦点を際立たせる印象となる。

(3) 【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】(ヌンとソーンの背について話している状況で)

「ヌンのほうが大きいんじゃないの？」

*nùnŋ súuŋ kwàa máy*  
PSN tall than.COMP Q

「いや、ヌンじゃなくて、ソーンの方が大きいんだよ。」

(3)-1.

*mây ná? mây chây nùnŋ sǒŋ [ròk/ tàŋhàak] thîi sǔuŋ kwàa <nâ?>*  
NEG FOC NEG PSN PSN FOC REL tall than.COMP FOC

(1)-1 で示した通り、タイ語では関係詞 *thîi* を用いて分裂文を形成し、主語を叙述の焦点として取り出すことが可能であるが、(3)-1 も *thîi* を用いた文型となっている。さらに句末小辞 *nâ?* を付加し関係節に焦点を当てている。さらに *sǒŋ* の後に焦点マーカ *ròk/ tàŋhàak* が付加されることにより、より主語 *sǒŋ* 「ソーン」に焦点を当てることになる。

(3)-2. 「いや、ヌンじゃなくて、大きいのはソーンだよ。」

*mây ná? mây chây nùnŋ thîi sǔuŋ kwàa nâ? sǒŋ [ròk/ tàŋhàak]*  
NEG FOC NEG PSN REL tall than.COMP FOC PSN FOC

(3)-2 のように自由関係詞 *thîi* を用いて、(1)-2, (2)-4 と同じく疑似分裂文によって、形容詞述語応答部分を左方転移することで、焦点を当てることも可能である。

(3)-3. 「いや、大きいのはヌンじゃなくて、ソーンだよ。」

mây ná? thii sũuŋ kwàa <nâ?> mây chây nũn sǒŋ [ròk/ tàaŋhàak]  
NEG FOC REL tall than.COMP FOC NEG PSN PSN FOC

(3)-4. 「いや、大きいのはソーンだよ。ヌンじゃないよ。」

mây ná? thii sũuŋ kwàa <nâ?> sǒŋ [ròk/ tàaŋhàak] mây chây nũn  
NEG FOC REL tall than.COMP FOC PSN FOC NEG PSN

(3)-3 と 4 では、疑似分裂文による形容詞述語応答部分が(3)-2 よりもさらに前方へ左方転移しているが、使用許容度は同じである。

(3)-5. 「いや、ヌンじゃないよ、ソーンの方が大きいよ。」

mây ná? mây chây nũn sǒŋ sũuŋ kwàa ná?  
NEG FOC NEG PSN PSN tall than.COMP FOC

(3)-5 のように、thii による分裂文構造や ròk/ tàaŋhàak による焦点マーカ―を使用しない構造も可能であるが、句末小辞 ná? は付ける方が自然である。ここでの ná? は、(3)-1~4 で現れている ná? と発音や機能が異なっている。(3)-5 の文末の ná? は声調が高声となっており、文全体に焦点を当てている印象がある。

#### (4) 【文焦点 (自動詞文)】

[電話で]

「どうした(の)?」

mii ʔaray <rǎə>  
there is what Q

「うん、今、お客さんが来たんだ。」

(4)-1.

ʔǎə phǒodii mii khèek maa ná?  
INTJ just there is guest come FOC

(4)-2.

ʔǎə phǒodii khèek maa ná?  
INTJ just guest come FOC

疑問文では存在を示す動詞である mii 「ある」と ʔaray 「何?」を組み合わせる。文末に疑問小辞 rǎə を付加すると発話者の驚きなどの主観的な態度を表出するのに対して、それらが付加されないと発話者が状況確認を淡々と客観的に行っている印象となる。疑問小辞 rǎə を ʔaray の後に付加することで、焦点を際立たせている。

応答文(4)-1 では同じく存在動詞 mii を用いて、主題を後置する形を取る。一方で、(4)-2 のように存在文を使わず SV 文型も使用許容となる。(4)-1 と(4)-2 の間で許容範囲の差はないが、(4)-1 は出来事の叙述であるのに対し、(4)-2 は状況叙述となる。また、(4)-1 も(4)-2 も句末小辞 ná? を付加することで、対話者にその出来事や情報を伝達する(峰岸・スニサー 2019) ニュアンスとなる。

(5) 【対比焦点(目的語)】

「あの子供がヌンを叩いたんだって!？」

<[dâyyin/hěŋ] wâa> dèk khon nán tii nùŋ rǎə  
hear/see that.COMP kid CLF that hit PSN Q

伝聞を示す動詞を使った文型とともに、驚きと確認を示す疑問小辞 rǎə を使用する。伝聞を示す動詞を使用しない場合は、事実を確認するニュアンスとなる。

「いや、ヌンじゃなくて、ソーンを叩いたんだよ。」

(5)-1. 「いや、ヌンじゃなくて、ソーンだよ。」

plàaw mây chây nùŋ sǒŋ <[ròk/tàaŋhàak/ná?]>  
NEG NEG PSN PSN. FOC

(5)-2. 「いや、ソーンだよ、ヌンじゃなくて。」

plàaw sǒŋ <[ròk/tàaŋhàak/ná?]> mây chây nùŋ  
NEG PSN. FOC NEG PSN

対比に焦点を当てるため、nùŋ「ヌン(人名)」と sǒŋ「ソーン(人名)」の間にポーズを入れる、もしくは焦点マーカ―ròk/tàaŋhàak/ná? を非表示とする場合は、sǒŋ を長めに言うなど発音に変化をつけることも必要となる。(5)-2のように焦点となる sǒŋ を文頭に置換することも許容されるが、焦点マーカ―ròk/tàaŋhàak/ná? が無い場合は、対比対象間に上記同様にポーズが求められる。

(5)-3. 「いや、ヌンを叩いたんじゃないで、ソーンを叩いたんだよ。」

plàaw mây dâŋ tii nùŋ tii sǒŋ <[ròk/tàaŋhàak/ná?]>  
NEG NEG hit PSN hit PSN FOC

mây dâŋ は動詞を対象とした否定表現であるため、対比焦点が目的語であったとしても、(5)-3のように動詞を繰り返し使用する必要がある。

(5)-4.

plàaw sǒŋ <[ròk/tàaŋhàak/ná?]>  
NEG PSN FOC

疑問文に対比対象となる nùŋ があることから、応答文にはもう1つの対比対象となる sǒŋ のみとすることで、敢えて焦点を際立たせることも可能である。その場合は、sǒŋ を長めに発音、もしくは文末に焦点マーカ―となる ròk/tàaŋhàak/ná? を付加するとより焦点が際立つ。

(6) 【対比焦点(目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う(の)?」

mii thũŋ sǐi deeŋ kàp sǐi fáa cà? súuu thũŋ nǎy  
exist bag color red and color blue VOL buy bag which

「(私は)青い袋を買うよ。」

<càʔ> <súuu> <thǔŋ> <sǐ> fǎa náʔ  
VOL buy bag color blue FOC

疑問文で対比焦点が色であることが明確に示されていることから、応答文では fǎa「青」、sǐ fǎa「青色」、thǔŋ sǐ fǎa「青い色の袋」の全てが使用の許容範囲内と考えられる。動詞 súuu「買う」を入れることも可能である。また、焦点マーカ―náʔ を入れることで、焦点が強化され、発話者の判断や態度を明確にすることができる。

(7) 【述語焦点】(例えば、朝少し遅く起きて来たヌンの父親が、姿の見えないヌンについて母親に尋ねている場面で)

「ヌンはどこですか？」

(7)-1. 「ヌンは？」

nùŋ lâʔ  
PSN Q

(7)-2. 「ヌンはどこ行った？」

nùŋ pay nǎy  
PSN go where

(7)-3. 「ヌンはどこ？」

nùŋ yùu nǎy  
PSN be where

疑問文は(7)-1～3のいずれも自然で使用許容度は同レベルである。発話者と対話者間で、nùŋ「ヌン(人名)」がご飯を食べたかなどではなく、ヌンの居場所が焦点となっていることを共有していることが条件となるが、(7)-1での疑問小辞 lâʔ を付加することで、疑問詞「どこ」を非表示とすることが可能となる。(7)-2では、ヌンが家を出てどこかに行ったことも含めて聞いているのに対して、(7)-3は家のどこかにいると思って質問している印象が読み取れる。

「ヌンは朝からどっかへでかけたよ。」

?òk pay nǎy/khâaŋnòk tɛ́ cháv léew  
go out go.DIR somewhere/outside from morning PRF

家族内での会話場面であれば、会話参加者全員がお互い知っているから、このような述語焦点の応答文は、通常主語を非表示とする。

(8) 【WH 焦点(目的語)・WH 応答焦点(目的語)】

「(あの子供は)誰を叩いたの？」

(8)-1.

<dèk khon nán> tii khray <rǎə>  
kid CLF that hit PRN.INDF Q

(8)-1 は、文脈の中で *dèk khon nán* 「あの子供」が初めて話題となった場合は、主語となる *dèk khon nán* は必須となるが、*dèk khon nán* が主題となっている場合は、「あの子供」を非表示とすることも可能である。驚きと確認を示す疑問小辞 *rǎə* は目的語 *khray* 「誰」の後に付加することで、WH 焦点が際立つ。

(8)-2. 「(あの子供に)誰が叩かれた？」

*khray thùuk <dèk khon nán> tii <rǎə>*  
 PRN.INDF PASS kid CLF that hit Q

(8)-2 は受け身文となるが、タイ語での受け身文は被害を表す場合に用いることが多い。受け身文とし、*khray* が主語となり文頭に來ることで、WH 焦点が際立つことになる。(8)-1 同様、*dèk khon nán* が文脈上既に主題となっている場合は、「あの子供」を非表示とすることも可能である。

(8)-3. 「あの子供が叩いたのは誰？」

*khray <rǎə> thii dèk khon nán tii*  
 PRN.INDF Q REL kid CLF that hit

(8)-3 は、関係詞 *thii* を用いて分裂文を形成しているが、WH 焦点(目的語)を叙述の焦点として取り出している。統語構造として *dèk khon nán* の表示が必須となる。(8)-3 は、(8)-1 や(8)-2 と比べ、使用頻度は低い。また目的語となる *khray* のすぐ後に疑問小辞 *rǎə* を付加すると、驚きや同情など発話者の主観的な気持ち/態度が読み取れ、WH 焦点 *khray* を際立たせる。

「(あの子供は)自分の弟を叩いたんだ。」

(8)-4.

*tii nǒŋ chaay <tuaʔeeŋ> <lǎʔ>*  
 hit brother male own FOC

(8)-5. 「自分の弟を」

*nǒŋ chaay <tuaʔeeŋ> <lǎʔ>*  
 brother.OBJ male own FOC

(8)-4 は(8)-1, (8)-5 は(8)-2(8)-3 に対応する回答文となる。(8)-4, 5 とも *tuaʔeeŋ* 「自分の」を非表示にすることも可能である。(8)-4, (8)-5 とも文末に句末小辞 *lǎʔ* を付加する場合、同情や驚きなどの発話者の態度を読み取れ、叩かれた対象となる *nǒŋ chaay* 「弟」への焦点を際立たせる。

(9) 【文焦点(他動詞文)】(例えば、電話の向こうで子供の泣き声が起きたのを聞いての発話)

[電話で]

「どうした(の)?」

*mii ʔaray <rǎə/ǎʔ>*  
 exist what Q



「うん, ヌンが (自分の) 弟を叩いたんだ。」

ʔəə nùŋ tii nɔ́ŋ chaay <tuaʔeeŋ> [náʔ/lɛʔ]  
INTJ PSN hit brother male own FOC

疑問文では(4)と同様に存在文動詞を用いて文焦点であることを表す。文末に疑問小辞 *rǎə* または *àʔ* を付加すると発話者の驚きなどの主観的な態度を表出するのに対して, それらが付加されないと発話者が状況確認を淡々と客観的に行っているニュアンスとなる。

続く応答文では(8)と異なり, 「誰を」叩いたではなく, 電話の背景で聞こえる泣き声や泣き声の原因といった事象, つまりは文全体に焦点を当てることとなるため, *tuaʔeeŋ* 「自分の」を非表示としても問題はない。文末に句末小辞 *náʔ* が付加されると「ヌンが弟をよく叩いている」ことを既に共通認識としている印象となり, 発話者には驚きなどがなく, 淡々と事態の説明をしていることを読み取れる。*náʔ* の代わりに *lɛʔ* が付加される場合は, 驚きや同情といった発話者の「ヌンの弟」に対する主観的な気持ちを読み取れ, 文全体に焦点を当てている形となる。また, ここでは「何か起きた」という情報を間投詞 *ʔəə* で受けて新情報を更新している。

(10) 【目的語主題化. 主題(目的語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

「あのケーキ, どうした?」

(10)-1.

khéek <chín nán> láʔ  
cake CLF that Q

(10)-2. 「ケーキはどこへ消えた/ある?」

khéek <chín nán> [hǎay pay/yùu] nǎy  
cake CLF that disappear/exist where

「(ああ, あれは)ヌンが食べちゃったよ。」

ʔəə <khéek> <chín nán> <rǎə> nùŋ kin pay léew <lɛʔ>  
INTJ cake CLF that Q PSN. eat go.DIR PRF PTCL

発話者と対話者がケーキの存在をお互いに認識している場合, (10)-1, 2 で示されている通り *chín nán* 「(類別詞)+あの」を非表示とすることは可能である。文末に疑問小辞 *láʔ* を付加することによって, *khéek* 「ケーキ」を主題化している。(10)-2 のように *hǎay pay* 「消えた」もしくは *yùu* 「ある」+*nǎy* 「どこ」とし, *khéek* の行方を普通に問う表現も自然である。

これらの疑問文に対する応答文は, 主題となる目的語 *khéek* を左方転移することに加え, さらに疑問小辞 *rǎə* を付加することによって, 主題(目的語)の *khéek* を確認しながら, 主題を継続している。また, 主題の維持の機能を有している間投詞(峰岸・スニサー2019)である *ʔəə* を文頭に置くことによって, 主題を継続することが可能になるため, 主題の *khéek chín nán* 「あのケーキ」を非表示することも可能である。また文末に句末小辞 *lɛʔ* が付加されると, この出来事(文全体)に対して, 同情や残念だという発話者の主観的な気持ちや態度が読み取れる。

ここまで見てきた通り, タイ語において焦点を当てる主な手段としては, 左方/右方転移, 分裂文等による文構造の変化の他, 情報結束語などの焦点マーカーとなる句末小辞や間投詞などの使用, そして焦点となる語の前でのポーズ挿入や焦点となる語句を長めに発音といった発音の変化などがある。

(11) 【分裂文】

「私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ。」

(11)-1.

thii	phǒm	súuu	maa	càak	ráan	múawaan	khuuu	<náŋsúuu>	lêm	nii
REL	PRN.M.1	buy	come.DIR	from	shop	yesterday	COP	book	CLF	this

タイ語の分裂文は、①自由関係詞 *thii*、②*siŋ/khǒŋ*(モノ)/*rúan*(コト)+関係詞 *thii*、③名詞+関係詞 *thii* がある。

(11)-1 は自由関係詞 *thii* 用いて、目的語を自由関係節として左方転移した分裂文であるが、このように文頭に左方転移された関係節は、対比的な主題として機能するため、このタイ語文ではお店からは本だけではなく様々なモノを買う習慣があることを前提に多様なモノがある中で「昨日買ってきたモノ＝本」であるという対比のニュアンスとなっている。なお、この文では *náŋsúuu* 「本」は非表示とすることが可能である。*náŋsúuu* を非表示とすると、「本」を意味する語が文中に出てこなくなるが、タイ語では類別詞により何を指し示しているか分かる場合があるため、類別詞 *lêm* があれば、買ったものが本であることが分かる。

(11)-2.

[siŋ/khǒŋ]	thii	phǒm	súuu	maa	càak	ráan	múawaan	khuuu	<náŋsúuu>	lêm	nii
thing	REL	PRN.M.1	buy	come.DIR	from	shop	yesterday	COP	book	CLF	this

(11)-1 と同じ文脈では、*siŋ/khǒŋ* 「モノ」といった語を明示した上で関係詞によって修飾する(11)-2 のような用法も可能ではある。

(11)-3. 「私が昨日お店から買ってきた本はこの本だ。」

náŋsúuu	thii	phǒm	súuu	maa	càak	ráan	múawaan	khuuu	<náŋsúuu>	lêm	nii
book	REL	PRN.M.1	buy	come.DIR	from	shop	yesterday	COP	book	CLF	this

普段より頻繁に購入しているものが本類のみという文脈であれば、(11)-3 のように *náŋsúuu* を関係節の前に明示することもある。

(11)-4. 「この本は私が昨日お店から買ってきた本だ。」

náŋsúuu	lêm	nii	khuuu	<náŋsúuu>	lêm	thii	phǒm	súuu	maa
book	CLF	this	COP	book	CLF	REL	PRN.M.1	buy	come.DIR
càak	ráan	múawaan							
from	shop	yesterday							

コピュラ *khuuu* は前後の名詞句の入れ替えが可能のため、(11)-3 を置換すると、(11)-4 の通りとなる。タイ語の基本的な情報構造では、文頭は主題、文末に近いものが情報の焦点の位置に置かれるため、(11)-4 では「この本」は、主題(旧情報)、「昨日お店から買ってきた本」は焦点(新情報)となる。*khuuu* 前後の名詞句での入れ替えは可能であるが、入れ替えによって焦点は異なってくる。

以降の例文でのタイ語訳文では(11)のようにコピュラ文を多く使用するため、タイ語コピュラ文の概要について、ここで簡単に述べておきたい。タイ語の名詞述語文では、「NP1(主語)+*pen/khuuu*+NP2(名詞述

語)とする文が成立する。一部, 明示しなくてはならない場合もあるが, 口語文では *pen* や *khuuu* を非表示とするケースが多い。否定文は「NP1(主語)+*mây chây*+NP2(名詞述語)」となるが, *mây chây* を非表示とすることはできない。

「NP1 *pen* NP2」は NP1 が NP2 という属性や特徴を持つ場合に使用するのに対して, 「NP1 *khuuu* NP2」は NP1 が NP2 と同一である場合に使用するとされているが, いくつか具体例を挙げて, その違いを紹介したい。

#### 参考例文①

①-a は「あの人=ヌンさん」と指示対象が同一であることを示しているが, ①-b のように *pen* を使用するとドラマなどでヌンさん役という属性を示すことになり, 文として成立はするが意味が異なるものとなる。

①-a. 「あの方はヌンさんです」

<i>khon</i>	<i>nán</i>	<i>khuuu</i>	<i>khun</i>	<i>nùŋ</i>
HON	PSN	COP	HON	PSN

①-b. 「あの方はヌンさん役です」

<i>khon</i>	<i>nán</i>	<i>pen</i>	<i>khun</i>	<i>nùŋ</i>
HON	PSN	COP	HON	PSN

#### 参考例文②

②-a では, 発話者が情報や知識に基づいて判断, 推測などといったモダリティ性が含まれており, 発話者の主観的叙述を含んだものとなっている。②-b のように命題内容に対して発話者の確信的な判断を示す *nâa cà?* 「はずだ」を付加すると, ②-a と同じ意味で発話者の主観がより明示的になる。

②-a. 「ヌンさんが彼のお父さんだ」

<i>khun</i>	<i>nùŋ</i>	<i>pen</i>	<i>khun</i>	<i>phô</i>	<i>khǒŋ</i>	<i>kháw</i>
HON	PSN	COP	HON	father	of	PRN.3

②-b. 「ヌンさんが彼のお父さんのはずだ」

<i>khun</i>	<i>nùŋ</i>	<i>nâa cà?</i>	<i>pen</i>	<i>khun</i>	<i>phô</i>	<i>khǒŋ</i>	<i>kháw</i>
HON	PSN	INFER	COP	HON	father	of	PRN.3

参考例文②-a で使用されている *pen* を *khuuu* とすることも可能である。②-c は②-a と異なり, 話し手の判断やモダリティ性は含まれておらず, 命題内容についての発話者の客観的な叙述となるため, ②-b のように *nâa cà?* を付加することはできない。

②-c. 「ヌンさんが彼のお父さんだ」

<i>khun</i>	<i>nùŋ</i>	<i>khuuu</i>	<i>khun</i>	<i>phô</i>	<i>khǒŋ</i>	<i>kháw</i>
HON	PSN	COP	HON	father	of	PRN.3

一方で, (11)-a で示した通り, *khuuu* 前後の名詞句は入れ替えが可能であり, ②-c と主語を入れ替えた②-d では *khun nùŋ* 「ヌンさん」に焦点が当たっている。

②-d. 「彼のお父さんはヌンさんだ」

khun phôo khǒŋ kháw khuuu khun núŋ  
 HON father of PRN.3 COP HON PSN

似て非なる pen と khuuu ではこういった説明が、現在のタイ語教育の中でもおおよそなされているが、それぞれ繫辞とは若干異なる用法があることにはあまり注目されていない。例えば pen には、参考例文③のように「～になる」といった意味での用法もある。

参考例文③ 「彼は医師になって5年になる」

kháw pen mǎo maa háa pii  
 PRN.3 become doctor come.DIR 5.NUM year

一方で、khuuu には、「それはだから/つまり」といった意味での用法もある。峰岸・スニサー2019 では、会話コーパスでの分析を行っているが、談話上で khuuu は談話の結束機能を担っていることも示している。その場合の特徴としては、a. 生起する位置は文頭のみ、b. (旧情報)+khuuu+新情報、c. 機能としては情報の維持・追加、といった点を挙げている。会話コーパスの分析結果では、主題(旧情報)のほとんどが非表示であったため、結果として khuuu が生起される位置が文頭のみとなっており、khuuu によって維持された主題に関して、その理由の説明などの新情報を追加している。

(12) 【措定文 主題(名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

khon nán <pen/khuuu> ʔaacaan thamŋaan thǐi roonŋrian níi maa sǎam pii léew  
 person that COP teacher work at school this come.DIR 3.NUM year PRF

タイ訳文でも日本語と同様2文目については、主題(名詞述語文の主語)の継続が可能である。

1文目については、pen も khuuu も使用することが可能である。pen の場合、前述の参考例文③と同じく「～になる」の意味となり、2文合わせて「あの人は先生になってこの学校でもう3年働いている」ニュアンスとなり、発話者の知識や判断に基づいて叙述している。一方、khuuu の場合は、発話者が「あの人=先生」であることを客観的に叙述・説明をしているニュアンスとなる。なお、ここでの pen と khuuu は、ともに非表示としても許容可能であり、前述の pen で表すニュアンス「先生になる」を明示したい場合は、pen を明示する必要がある。

(13) 【倒置同定文】

「彼のお父さんは、あの人だ。」

(13)-1.

khun phôo <khǒŋ> kháw <khuuu> khon nán  
 HON father of PRN.3 COP person that

(13)-2. 「(彼のお父さんは、)あの人だ。」

khon nán ŋay <khun phôo khǒŋ kháw>  
 person that FOC HON father of PRN.3

含意されている前提として「この人たちの中で、彼のお父さんはどの人？」への応答文としてタイ語に訳している。「彼のお父さん」が主題＝旧情報であり、「あの人」が焦点＝新情報となる。「彼のお父さん」と「あの人」は指示対象が同一であり、伝達情報に発話者の判断が含まず、客観的に情報を提供する場合は *khuuu* を使用することになるが、非表示も可能である。

また、「この人たちの中で、彼のお父さんはどの人？」への応答であれば、(13)-2 のように焦点となる名詞述語を左方転移し、焦点マーカ―となる句末小辞 *ɲay* を付加する文も自然であり、この場合は旧情報となる「彼のお父さん」を非表示とすることも許容される。

(14) 【同定文】

「あの人(が)彼のお父さんだ。」

(14)-1.

<i>khon</i>	<i>nán</i>	< <i>pen/ khuuu</i> >	<i>khun</i>	<i>phôo</i>	< <i>khǒɔŋ</i> >	<i>kháw</i>
person	that	COP	HON	father	of	PRN.3

(14)-2. 「あの人だよ(、彼のお父さんは)」

<i>khon</i>	<i>nán</i>	<i>ɲay</i>	< <i>khun</i>	<i>phôo</i>	<i>khǒɔŋ</i>	<i>kháw</i> >
person	that	FOC	HON	father	of	PRN.3

ここでの含意されている前提は(13)と同様「この人たちの中に彼のお父さんがいる」になるが、(13)では *pen* は使用することはできないが、(14)では使用することが可能である。*pen* の場合、父親、祖父、叔父など男性の家族・親族が複数いる状況で、どの人が父親かの判断が難しい場合など、推測も含め、発話者の判断が含まれているニュアンスとなる。一方で、*khuuu* の場合は、発話者が既に誰が父親かを認識しており、客観的に「あの人＝彼のお父さん」という情報を提供していることとなる。*pen* も *khuuu* も非表示が可能であるが、その場合はどちらのニュアンスであるかが伝わらないことになる。

また、(14)-2 のように、焦点の名詞述語を左方転移し、焦点マーカ―を付加することで、旧情報である「彼のお父さん」を非表示とすることも可能である。

(15) 【定義文】

「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

(15)-1.

< <i>kham</i>	<i>wâa</i> >	<i>mûawaansuun</i>	< <i>kôo</i> >	<i>khuuu</i>	<i>wan</i>	<i>tò</i>	<i>càak</i>	<i>wanphrûŋnii</i>	< <i>ɲay</i> >
word	that.COMP	day after tomorrow	also	COP	day	next	from	tomorrow	FOC

(15)-2 . 「あさってっていうのはね、あしたの次の日という意味だよ。」

< <i>kham</i>	<i>wâa</i> >	<i>mûawaansuun</i>	<i>măaythûŋ</i>	<i>wan</i>	<i>tò</i>	<i>càak</i>	<i>wanphrûŋnii</i>	< <i>ɲay</i> >
word	that.COMP	day after tomorrow	mean	day	next	from	tomorrow	FOC

(15)-1 では、*kôo* の非表示は可能であるが、言葉の意味や定義を説明する文では、NP1＝NP2 であることを示すコピュラ *khuuu* は明示する必要がある。談話上では、同じく旧情報の維持を行う機能として使用されている *kôo*(峰岸・スニサー2019)を *khuuu* と一緒に複合語として使用することが多い。また、*khuuu* の代わりに(15)-2 のように *măaythûŋ* 「～という意味だ」も使用可能である。焦点となる新情報 *tò càak wanphrûŋnii* 「あ

したの次の日」の後に焦点マーカとなる句末小辞 *ɲay* を付加することで、新情報により焦点を当てることとなる。

(16) 【ウナギ文】

[何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて]

「私はコーヒーだ。」

(16)-1.

*chán* *kaafɛɛ*  
COP coffee

(16)-2. 「私のはコーヒーだ。」

*khǒŋ* *chán* *kaafɛɛ*  
thing PRN.F.1 coffee

(16)-3. 「私はコーヒーが欲しいです/コーヒーをください。」

*chán* *khǒŋ/ɲaw* *kaafɛɛ*  
PRN.F.1 want/take coffee

コンピュータを使用しないのがタイ語としては自然であり、(16)-1, 2, 3 の許容度は同程度である。

(17) 【逆行ウナギ文】

[注文した数人分のお茶が運ばれてきて「どなたがコーヒーですか？」との問いに]

「コーヒーは私だ。」

(17)-1.

*kaafɛɛ* <*nâ/ɾǎə*> *phǒm*  
coffee FOC PRN.M.1

(17)-2. 「私だ。」

*phǒm*  
PRN.M.1

(17)-3. 「私のだ。」

*khǒŋ* *phǒm*  
of PRN.M.1

(17)-1 のように、旧情報である *kaafɛɛ* 「コーヒー」を文頭に置き主題化し、その後焦点マーカとなる句末小辞 *nâ* や疑問小辞 *ɾǎə* に続けて、新情報つまりは焦点となる *phǒm* 「私」を言う形となる。*nâ/ɾǎə* を非表示とすることも可能であるが、*kaafɛɛ* と *phǒm* の間にはポーズを入れる必要がある。ポーズをいれない場合、「私のコーヒー」という意味となり、異なった意味となる。また、(17)-2 のように新情報となる *phǒm* のみ、もしくは(17)-3 のように帰属や所有を表す *khǒŋ* 「～の～」を入れることも自然である。(17)-1～3 の使用許容度は同程度である。

(18) 【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

「その新しくて厚い本は(値段が)高い。」

(18)-1.

náŋsǔuu	lêm	màʔ	lêm	nǎa	lêm	nán	<raakhaa>	phɛɛŋ
book	CLF	new	CLF	thick	CLF	that	price	expensive

(18)-2.

náŋsǔuu	nǎa	léʔ	màʔ	lêm	nán	<raakhaa>	phɛɛŋ
book	thick	and	new	CLF	that	price	expensive

名詞を複数の語で修飾するには、2つの方法がある。まず(18)-1のように類別詞 *lêm* によって、修飾対象となる名詞「本」を特定する方法である。タイ語では、名詞を特定する場合は「名詞+類別詞+形容詞/指示詞」の組み合わせとなる。被修飾詞の名詞は1度だけ使用し、類別詞の繰り返しにより、被修飾詞を特定しつつ連体修飾を行う。もう1つの方法は、(18)-2で示したように、形容詞をまとめる形で類別詞を使用する方法である。この場合は、形容詞 *nǎa* 「厚い」と *màʔ* 「新しい」は *léʔ* 「そして」で接続する必要がある。なお、(18)-1, 2とも形容詞が先で、指示詞は後になる。

(19) 【意外性(mirativity)】

[砂糖の入れ物を開けて]

「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

ʔáaw	námtaan	mòt	<lɛ́ew>	àʔ
INTJ	sugar	finish	PRF	FOC

峰岸・スニサー2019 の中では具体的に挙げていないが、会話コーパスの分析の中で、間投詞と句末小辞には談話上の新情報の導入機能を有するものがあつた。例えば、間投詞 *ʔáaw* と句末小辞 *àʔ* などがそれに該当する。(19)では間投詞 *ʔáaw* を文頭、句末小辞 *àʔ* を文末にそれぞれ置くことによって「砂糖が無くなっている」という情報が発話者にとって予測に反することを示し、意外性を表す役割を果たしている。*ʔáaw* もしくは *àʔ* のいずれかを非表示としても意外性を表すことはできる。

(20) 【思い出し】

「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ？ あっ、そうだ！田中君だったな。」

tɔɔnbàay	tɔŋ	cəə	khɔ́ay	náʔ	khɔ́ay	náʔ
afternoon	have to	meet	PRN.INDF	PTCL	PRN.INDF	PTCL
ʔɔɔ	cɪŋ	sɪʔ	naay	thaanaakáʔ	nǐiʔeeŋ	
INTJ	true	FOC	HON	PSN	FOC	

孤立語であるタイ語に動詞のテンスはなく、間投詞 *ʔɔɔ* や句末小辞 *sɪʔ*, *nǐiʔeeŋ* によって「思い出し」を表している。

### 略語リスト

1	一人称	first person	INTJ	間投詞	interjection
3	三人称	third person	NEG	否定	negation, negative
CLF	類別詞	claassifier	NP	名詞句	noun phrase
COMP	比較	comparative	NUM	数辞	numeral
COMP	補文マーカ	complementizer	PASS	受身	passive
COP	コピュラ	copula	PRF	完了	perfect
DIR	方向動詞	directional	PRN	人称代名詞	personal pronoun
F	女性	feminine	PSN	人名	person name
FOC	焦点	focus	PTCL	小辞	particle
HON	敬称	honorific	Q	疑問小辞	question particle
INDF	不定	indefinite	REL	関係詞	relative
INFER	推量	inferencial	VOL	意志	volitional

### 参考文献

- 峰岸真琴.2019. 「タイ語の情報構造に関わる諸表現」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第 50 号, pp.189-204.
- 峰岸真琴・スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019. 「タイ語の主題とその談話での現れ方について」『言語の類型的特徴対照研究会論集』第 2 号, pp.111-135.
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017. 「タイ語話し言葉コーパスから見た「語用論的終結小辞」」『アジア・アフリカ言語文化研究』94 号, pp.111-136.

執筆者連絡先 : sunisa@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2019 年 12 月 25 日